

ロータリー月例報告書 vol.5

留学先：レッジョエミリア音楽院（イタリア）

11月に入り、雪こそないものの北イタリアでは雨も多く、気候帯として北海道と近いということもあって肌寒い日が続いています。今月下旬からは街頭でのクリスマスイルミネーションの飾り付けも始まり、こちらでも一年の終わりを感ぜさせる時期となりました。私事としましては、レッジョエミリアの様々な背景から家探しに難航していましたが、幸運にも共同住宅の一つが見つかり、今月半ばより居を構えて生活を始めました。

学校生活は、一ヶ月を経て少し勝手がわかってきたものの、音楽史や作曲法などの授業は非常に早口で難しい専門用語も多く、授業の録音を聞き返す毎日です。わからないところを確認すると簡潔にわかりやすい単語で伝えてくれる教授やクラスメイトが多く、つくづく環境に恵まれていると実感しています。

歌曲の授業やレッスンでは、ドイツ語フランス語のものを含め沢山の譜面を与えられる一方で、他者に当てられた重唱と一緒に取り組むことも非常に多く、読まなければいけない楽譜が積み上がっています。また、暗記が前提となる舞台演出の授業も本格的に始まりました。そんな中で発音について訂正される機会も非常に多く、自身の課題点にも直面しています。しかしながらそういった中で多くのやりがいを感じており、やりたかったことに向き合っている実感もあり、充実した日々を過ごせているように感じます。

さて、今月はモデナにあるパヴァロッチ博物館と、レッジョエミリアで行われたウクライナ出身者たちのチャリティーコンサートについて写真を掲載します。

家探しのため11月頭よりモデナに滞在する期間があり、その期間に必ず行こうと決めていたパヴァロッチ博物館に行ってきました。この博物館は生前パヴァロッチが住んでいた自宅を博物館として公開しているもので、彼が使っていた楽譜や衣装など、所有物がそのまま保管されています。

中でも、彼が友人らや家族と談笑している映像なども公開されており(動画は撮影禁止のため持ち帰ることができませんでしたが)、彼がどんな人柄だったのか、歌うときと日常の様子はどのように違うのかを知ることができます。数多く開催されていたチャリティーコンサート「パヴァロッチ&フレンズ」での取り組みや、マエストロ宛ての数多くの手紙、この博物館を訪問した人たちからの寄せ書きなども掲載されていました。イタリアの国宝、キングオブハイCと称されたパヴァロッチの歌声と、その人間性を愛する沢山の思いに触れることができ、心温まるひとときでした。

次いで、11月下旬にウクライナ出身者たちのチャリティーコンサートがありました。同級生が2人歌うということで聴きに行きましたが、今回の演奏会は、演奏技術というよりも音楽の在り方について非常に考えさせられるものでした。というのは、初めて聴いた彼女たちの演奏についてよりも、ウクライナのフォークソングを歌っている場面で小さく震



パヴァロッチ博物館の外観



パヴァロッチ&フレンズ出演者たちの写真

えた声で口ずさむのが周囲から聞こえてきたことや、演者と家族が力強く長い時間抱擁している場面を見かけたことが強く印象に残ったためです。懐かしい音楽を聴いて涙を流すこと、久しく顔を見られていない家族や友人に会うきっかけとなりうること、その声を聴けること、聴いてもらえて嬉しく思うこと。音楽や美術といった芸術にはそういった心の栄養となる側面があることを改めて感じました。また、こうした沢山の理不尽を受けた当事者たちに直接関わることで、悲しみや憐憫、憤りなどの沢山の感情が入り混じる感覚を覚えました。

演奏後にも無料配布されたコーヒーを携えて多くの方が和やかに会話しているのを見ましたが、暖かい雰囲気話をしてる彼らがどういった状況下

にいるのか、どういった気持ちでこの演奏を聞いていたのかと考え、胸が詰まる思いでした。今もなお命が脅かされている人がいるという現実を忘れてはいけないという思いと、しかし今こうして身近で過ごす彼らと共に、変に美化せず身の丈で当たり前の日常を過ごす中で、これからも切磋琢磨していきたいと感じる時間でした。



コンサート出演者たちのカーテンコール

師走の忙しい時期に差し掛かり、体調等崩しやすい頃合いかと思えます。自身として体調管理を今一度意識し、一年の終わりまで止まらずに駆け抜けていきたいと考えています。

末筆となりますが、今後とも皆さまからの変わらぬご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。